

土佐浄瑠璃の脚色法（四）

——新道成寺「定家」の位相——

鳥居 フミ子

はじめに

土佐浄瑠璃「定家」の脚色上の特色を考察し、道成寺ものの系譜の上にしめるユニークな位相について考えてみたい。

一 版本と上演年代

土佐浄瑠璃「定家」には次のような版本がある。^(注1)

一定家 八行四十八丁

内題「定家」 尾題「新道成寺」

刊年 扉表に「宝永五戊子初秋上旬」と記す。

小伝馬町三丁目 木下甚右衛門板

二 新古今歌合 絵入り十六行十丁

内題 新古今歌合

刊年 享保九^{甲辰}正月吉日 木下甚右衛門板

三 新道成寺〔仮題〕絵入り十一行七丁

内題 初丁表に「新道成寺 ていかみちゆき章さし」、五丁表に「ていか宿入り」、九丁表に「ていか今日高川」と記す。

「定家」の第四段め（新道成寺に相当する部分）を抄出して挿絵を加えたもの。

四 抜き本

（板元）

しんどうしやうじ ていかの宿入り
官女浅間嶽

さかい丁 中嶋や

ていか宿入り

長谷川町 あふみや

うかれ
馬かた

定家の道行

小伝馬町三丁目 木下甚右衛門

しんどうしやうじ ていかの道行
うかれ馬かた

はせ川町 あふみや

新道成寺 ていかみちゆき

△不明▽

しんどうしやうじ 野分をんれう
しゆく入りの次

三嶋町 菱屋市兵衛

ていか三段め 野分れんぼの段

△不明▽

新道成寺 いのりのだん

藤田

定家一字題 かつこの段

大吉屋

しぐれのちん

△不明▽

「定家」は、八行四十八丁本の扉表には「宝永五_戌子初秋上旬」の刊記があり、絵入り本「新古今歌合」には「享保九_{甲辰}正月吉祥日」の刊記があるが、実際には元禄年代より上演されていたものである。左のような上演記録がある。

○元禄十五年一月三十日 一、御あやつり例のごとし。去冬御舞台新に大奥の御殿の前に立也。塩屋文しやう一返、次に定家のあやつり也。午前に始り戌の上に済也。

(日乗上人日記)

○元禄十五年二月十三日 一、上るり定家、次源氏袖かゞみ、今日は土佐来りたり。

()

「定家」は貞享三年の刊記のある土佐節逸題段物集(木下板・鱗形屋板の二本)に収められておらず、元禄六年の刊記のある「名寄色竹」にも扱われていないので、土佐少掾の最も早い頃の語りものにはなかったと考えられる。少くとも「名寄色竹」の刊行された元禄六年以後の作である。八行本「定家」の正本は数多く現存し、絵入り本や抜き本類の種類も多く現存している。また、多くの土佐節段物集に収められていることなどから、土佐節としては相当流行したものであることが分る。元禄年代は初代土佐少掾の活躍期である。延宝頃から江戸で活躍しはじめた土佐少掾は、元禄年代には最盛期をむかえていた。「定家」は初代土佐少掾の元禄中頃の代表的な語り物の一つであったと考えられるものである。

本曲は、八行本の内題に「定家」とあり、尾題に「新道成寺」とあることによっても推察されるように、「定家」と「新道成寺」の両面をアピールしようとしたものである。絵入り本や抜き本などの扱い方をみても、この両面性がよく現われている。「定家」とも云われ、「新道成寺」ともよばれる二面的性格に、本曲の脚色上の特色がうかがえるのである。

「定家」のあらすじは次のようである。

第一 後鳥羽院は七人の歌人を撰んで『新古今集』を撰集された。

撰者の一人藤原定家は歌道の名哲と仰がれ、主上をはじめ公卿たちに歌道を講じている。女三宮式子内親王も歌を学んでおられたが、定家は密に宮をお慕いし、野分の局を介して文を送り、大内の長谷の御堂で歌の上句と下句を合言葉として逢うことを申し合わせる。

禁裏北面の侍平左近時国は、内親王に恋慕していたが、内親王が長谷の御堂へお忍びと聞いて内親王を強奪することを計画する。

夕暮になり、時国は二人の郎等をひきつれて長谷へ行き、姫を強奪するが、定家の郎等大江左衛門忠重が格闘の後、姫を奪い返す。

第二 時国は、定家にうらみをはらし、内親王を奪い返すために謀をめぐらす。摂政良経を訪れ、世間話に興をもよおす折柄、縁の下から大男が飛び出して良経を突く。時国は男を組み伏せ、それを定家の企みとして白状させる。時国は良経をそそのかして討手を蒙り、二百騎の軍勢で定家の館を攻める。

大江左衛門忠重は定家を落して奮戦する。やがて五条三位家隆が仲裁にきて、一旦事静まる。

第三 姫宮は定家恋しく、小夜島勾当を使として、小倉山時雨亭の定家の許へ一節切ひとよぎりを送る。

うち沈んでいた定家は、小夜島勾当の琴に合わせて一節切を吹いてしばし慰む。姫宮は男装して時雨亭に近づく。定家と姫宮は盃をかわし、契りを結ぶ。

二人が後朝きんぎふの別れを惜しんでいると、定家の袂から野分の局が送った文が落ちる。その文を焼くと、煙の中から恨めしそうな女の姿が現われて定家に近づく。定家が太刀を抜いて払うと、野分の局があけにそまって倒れている。姫宮は野分を勘当し、女房達に迎えられて帰途につく。

第四 家隆卿は、定家と良経を和談させ、内々に事を収めようとする。しかし時国は奏聞して討手となり、定家を攻めてくることになる。

定家は駿河国藤川の寂蓮法師の許へ落ちのびるために藤川さして下る（節事）。

やがて池田の宿について馬子を帰そうとすると、馬子というのは定家を恋い慕う野分の局であった。

定家は野分をだまし、夜中に忍び出て大井川を渡る。野分は定家を追いかけて、川に飛び込み、妄執の一念から大蛇となって忽ち川を渡り、忠重に飛びかかる。忠重は大蛇をさんざんに切り散らして大井川に投げ入れ、藤川へと急ぐ。

第六 家隆卿は、定家のとがなきをあかすために、関白に定家と時国の対決を願ひ出る。対決の場に時国の郎等岩波弥七が呼び出され、その証言によって、時国の陰謀は悉く暴露される。定家は大和に三千町を給わり、天下は再びめでたき世にかえる。

以上のあらすじであきらかなように、本曲は定家と式子内親王の恋愛談を主軸とし、それに新道成寺と呼ばれる野分の局の嫉妬談を挿入したものである。この両要素について、先行作を見ながら、脚色上の特色を考察することにする。

二 定家と式子内親王との恋愛談

藤原定家と式子内親王とが恋愛関係にあったか否かについてはさだかでない。^(注2)『謡曲拾葉抄』巻五に次のように述べられている。

雜文集云今は昔後白河院の皇女式子内親王と申奉るあり初は加茂イツキノミヤの齋宮イサミヤにそなはり程なくおり居させ給ふに定家卿をよばすなから御心さし浅からさりけり有時まいり給ひて「歎共恋ふ共あはんみちやなき君葛城の峰の白雲と口すさふやうにて申させ給ふ此卿はけしからずみめわろき人なりければ齋院御返しにも及ばすその御つらにてやと計仰られて打そふかせ給へは御こと葉の下より定家「されは社夜とは契れ葛城の神も我身も同じ心にとよみ給ひけるとなん」^{已上}（日本文学古註釈大成『謡曲拾葉抄』による）

これによれば、定家は式子内親王を恋い慕って、その想いを歌に托したのであったが、式子内親王は定家の容貌が悪かったので、全く問題にもしなかったというのである。

定家と式子内親王を深い恋愛関係に結びつけたのは謡曲「定家」がはじめである。謡曲「定家」は世阿弥作とも金春禅竹作とも伝えられる複式夢幻能である。その内容は次のようである。

諸国行脚の僧が亭に雨やどりしていると里の女が現われて、この亭は定家の住んだ時雨しぐれの亭ちんであると告げ、僧を式子内親王の墓へ案内する。女は僧にむかって、定家は人目を憚んで内親王と深い契りを結んだが、内親王の死後、定家の執心が葛かずらとなって内親王の墓にはいまつわり、二人ともに邪淫の妄執に苦しんでいると話す。

僧は法華経を誦する。最前の女は実は式子内親王の化身であった。法華経の徳により内親王の霊が現われ、定家葛も解けて成仏できたことを喜び、報恩のために昔の華やかな姿そのままに舞を舞い、やがてもとの葛のまつわる墓の中に消える。

ここでは定家と式子内親王との恋愛は過去の出来事として扱われ、舞台では定家との深刻な恋を式子内親王の側から述べるという形になっている。

能楽の舞台が、定家と式子内親王との恋愛を過去のこととして扱っているのに対して、浄瑠璃はこれを現実のこと

として、その経緯を描くことになる。過去の物語から現実の事件への転換……これが中世の能楽から近世の浄瑠璃への展開である。土佐浄瑠璃「定家」も、まさに現実の物語として定家と式子内親王との恋愛談を再現するのである。

しかし、「定家」に扱われている恋愛談の現実描写は、土佐浄瑠璃がはじめて行ったものではない。その先行作として現存するものに、古浄瑠璃「小倉山百人一首」がある。

「小倉山百人一首」は次のような古浄瑠璃である。

天下一上総少掾藤原正信正本 五段

寛文十二年刊 山本九兵衛板

第一 藤原定家は和歌の道に秀でながら歌風が後白河法皇の御意にそわず、これを悲しんで小倉山に隠れ、百人一首を撰んで秘蔵している。

源平の争いが絶えず、法皇は摂政藤原元道の勧めによって暫く中絶していた加茂の斎宮を設けることにする。

女三の宮式子内親王が斎宮に選ばれ、奉幣使として定家を選ばれる。

式子内親王に玉章たまささを送りながら顧みられなかった橘諸賢は、定家が奉幣使となったことを嫉妬し、式子内親王と定家の密会の噂を持ち出し、証拠の和歌をさし出して、内親王の斎宮起用に反対する。定家は、歌の道を教えるには恋の歌が必要であると答弁し、諸賢はかえって勅勘を受けることになる。

加茂奉幣の折に、内親王と定家は互いの心をあかし合う。神前には奉納の神楽が華やかに行われる（節事）。

第二 定家は小倉山を忍び出て、北野千本松の時雨亭で式子内親王と逢っていると、諸賢の郎等が二人を捕えようと襲ってくる。定家の臣、藤内と菊丸は奮戦し、定家と内親王に落ちのびるようにすすめるが、内親王は動こ

うとしない。藤内と菊若も負傷し、いよいよ危険というとき、震動雷電して二人の童子が現われ、加茂の明神の神勅を伝えて二人を救う。

第三 定家は内親王を伴って小倉山にむかいながら道中の風景を説明する（景事）。

小倉山の山荘に着き、百人一首の似せ絵の間に内親王を案内し、百人一首撰集の由来を物語る（節事）。

第四 定家の父俊成の使がきて、世間のとりさたがうるさいから式子内親王を帰すように伝える。

内親王は別離の悲しみに沈みながら、致し方なく小倉山をあとにする。定家は内親王を見送って剃髪し、嵯峨野の奥、清滝川のほとりの草庵に行います。

諸賢は、定家の行いが彼の言った通りであったことが分って勅勘を許される。

内親王は、定家から送られた黒髪をみて堪えられなくなり、乳人ゑもんの介をつれて定家の草庵を訪れる。

定家は頑として内親王に逢おうとせず、住持にたのんで二人を帰そうとするが、乳人は、内親王が滝に投身したと偽って定家を誘い出し、無理に京都へ連れ帰る。

第五 諸賢の郎等は、京都にむかう定家・内親王・乳人の三人を捕縛して御所に訴える。内親王は土佐へ、定家は佐渡へ流されることになるが、加茂の神主が神託を告げ、定家と内親王の和歌の徳をたたえ、諸賢は雷電大雨の中を虚空にさらわれる。内親王は斎宮を下りてちがやの宮に、定家は和歌所に入ることになる。

「小倉山百人一首」は、定家と内親王の恋愛談を主題にしている。内親王の恋歌を百人一首の中に入れ、百人一首撰集の由来を定家が内親王に語ってきかせるところから「小倉山百人一首」の題名がつけられている。

内親王は斎宮を仰せつかった身でありながら定家への恋情をおさえることができず、橘諸賢によって窮地に追い込

まれる。諸賢は内親王を恋慕し、文を送ってもかえりみられなかった恨みを持って、定家と内親王を攻めるのであるが、それは内親王を手に入れるためでもあったが、より強く定家への嫉妬が動機となっている。和歌の達人として加茂の奉幣使に定家を選ばれたとき、諸賢は

此たひの、ほうへいし、あら、ねたましやくくと、心きやうきになれころも
とあるように、嫉妬のために気も狂わんばかりになったのである。

第二段めは、諸賢が定家と内親王を攻めて戦闘場面となる。定家の郎等藤内と菊丸が奮戦するが不利となる。加茂の明神につかえる童子が現われ、神勅により定家と内親王は救われる。二人は和歌の徳によって神に救われるのである。第五段めの曲尾も、定家と内親王が諸賢によって捕えられて流罪となったとき、加茂の明神の神託によって救われ、諸賢がかえって虚空に連れ去られて命を落すことになっている。定家と内親王は和歌の達人として神に守られ、二人を陥れようとするものは神によって罰せられるのである。和歌の功德談、加茂明神の靈驗談としての性格が極めて濃厚である。

土佐浄瑠璃「定家」には、「小倉山百人一首」の基調となっている靈驗談的性格が全くなっている。諸賢に相当する人物として平左近時国が登場する。時国は式子内親王に恋慕し、恋が容れられないと分ると、内親王を強奪しようとする。

恋の敵は定家なり。何とぞ手だてをめぐらして。定家をなき身となし。夜前のむねんをさんじつゝ。又姫宮をも
うばいとり。思ひのまゝに契るべし。

ここでは「小倉山百人一首」にあった定家が和歌の奉幣使になったことへの嫉妬はなくなっている。純然たる恋の恨みとし、姫宮を奪いにとって我がものにしようという動機で定家の館を攻めることになっている。「定家」では恋愛

談としての性格がはっきりしたといふことができる。定家の家臣大江左衛門忠重は、時国方の軍兵をむかえ討って、忠勇無双の大活躍をする。かくして、第二段めは戦闘場面が展開することになる。

このような戦闘場面が設けられているのは、この期の土佐浄瑠璃がその中に公平浄瑠璃的要素をかかえ込んでいるといふことである。土佐浄瑠璃は公平浄瑠璃衰退後の江戸に歓迎されて、元禄期の江戸浄瑠璃を代表するに至ったのであるが、それは、公平浄瑠璃のアンチテーゼというよりは、公平浄瑠璃的なものを中にかかえ込んだものであったのである。公平な戦闘場面を部分的に見せながら、恋愛の場面を展開し、節事をきかせ、舞踊を見せるのである。公平浄瑠璃的戦闘場面は一曲構成の重要な要素として部分的に扱われる。これが元禄期土佐浄瑠璃の脚色法であったのである。元禄年代の上演と推定される土佐浄瑠璃には、このような公平浄瑠璃的戦闘場面を二段めに見せているものが数多くある。代表的なものを次に挙げてみよう。

◇塩谷文正物語 第二

坂東の国司道重は、文正の姫への恋の仲介を承知してくれない大宮司を恨み、木母之介宗次にそそのかされて、三百騎をひきつれて大宮司を夜討にする。

◇世継曾我 第二

新開荒四郎は朝比奈に悪口され、五郎丸と談合して朝比奈の館を攻める。

◇蟬麻呂 第二

時平は三位の姫を奪わんとして、二百騎にて三位の館へ押し寄せる。

◇塩釜大臣 第二

物部春主の手勢二十騎は、うてなの前に慰められている融大臣を攻め、大臣の部下折風と斬り合う。

◇源氏十二段 第二

熊坂の長坂は牛若を攻める。戦闘の後、牛若は長坂一党を滅ぼす。

◇なにはものがたり 第二

家平の弟年秀は、宗広を襲い、戦闘の後滅ぼす。

◇大職冠二代玉とり 第二

鎌足は大物浦で数百の兵船を討つ。

「定家」第二段めの戦闘場面は家隆卿の仲裁によって終る。「小倉山百人一首」の戦闘場面が加茂明神の靈驗によって收拾されるのに対し、「定家」は、敵味方の戦闘をなまなましい人間の戦いとして終始し、第三者の仲裁によって中断することになる。曲尾で、時国が罰せられるのも、時国の郎等岩波弥七の証言によって悪事が露見したことによる。「小倉山百人一首」の諸賢が、雷によって虚空に連れ去られ、微塵となって失せたのとは対照的である。

このように「定家」は、「小倉山百人一首」の靈驗談的要素を全てとり去っているのである。時国に対するに定家の重臣重忠との戦いを、なまなましい戦闘として描き、郎等の裏切りによって時国は滅びることになる。靈驗談的要素を捨てて、終始人間の物語としたところに土佐浄瑠璃「定家」の脚色上の特色がうかがえるのである。

「定家」の登場人物や構成は、基本的には「小倉山百人一首」を継承したものである。その関係を、登場人物を中心に整理すれば次のようである。

小倉山百人一首	定家	役柄
定家 式子内親王 橘諸賢 藤内と菊若 乳人ゑもんの介	〃 〃 平左近時国 大江左衛門重忠 野分の局 家隆卿 寂蓮法師 岩波弥七	<p>恋愛関係</p> <p>姫に恋慕し、姫が受け容れないので定家と姫を攻める。 定家の臣。定家を守って奮戦する。 姫に仕え、姫の恋の成就に尽力する。（野分の局は後に定家に恋慕して蛇身となる。） 戦闘の仲裁に入り、定家の罪が許されるように尽力する。 野分の局の怨霊をしづめる。 時国の郎等。時国の悪計を証言して、定家と姫を流罪から救う。</p>

「小倉山百人一首」の内親王の乳人ゑもんの介は、「定家」では野分の局となる。「小倉山百人一首」のゑもんの介は、内親王に仕え、ひたすらその恋の成就に骨を折る人物であるが、「定家」の野分の局は、前半ではゑもんの介の役柄と同じで、姫のために尽力するのであるが、第四段めでは馬子に変装して定家に近ずき、道成寺もどきの場面となる。野分の局の性格は二重性格で、前半は「小倉山百人一首」のゑもんの介を継承しているのであるが、後半は新道成寺の挿入のために別人格となっているのである。

家隆卿・寂蓮法師・岩波弥七は「定家」の新しい登場人物である。寂蓮法師は、新道成寺の場面のために必要とされた人物、家隆卿と岩波弥七は、定家を危機から救う役柄で、「小倉山百人一首」の加茂明神の靈験にかわる働きをする人物として登場することになっている。

「定家」の主筋は「小倉山百人一首」に比較すると、歌の功德談の要素をとり去ったところに特色がある。「定家」

においては、「小倉山百人一首」の重要な見せ場であった百人一首撰集の節事は削られ、冒頭は百人一首撰集の後の場面として設定されている。定家と式子内親王は和歌によって結ばれ、和歌の上句と下句を合言葉にして密会したり、式子内親王の定家への恋歌が百人一首の中に入れられることが扱われるなど、その内容は和歌との関係が極めて密接である。しかし、「小倉山百人一首」のように、二人が歌の達人であるが故に救われるということはない。忠ある臣によって救われ、誠ある友人の尽力によって罪を免れることになる。「小倉山百人一首」が歌の功德を前面に押し出しているのは中世的発想によるものということができるであろう。靈驗談的要素をとり去った土佐節「定家」は、近世的恋愛談として再生したということが出来るであろう。ここに、土佐浄瑠璃を支えている近世的合理精神を見ることができるのである。

定家と内親王の恋愛談を正面から扱った浄瑠璃は、土佐浄瑠璃「定家」の後には上演されなかったようである。「小倉山百人一首」に類似する題名を持つ浄瑠璃に紀海音作「新百人一首」がある。宝永五年秋頃豊竹座上演 豊竹上野少掾正本 正本屋西沢九左衛門版 六・七行七行九十丁本である。「定家」よりも後の上演と推定されるものであるが、定家や式子内親王は登場せず、定家卿の命日の玉祭りの追善に、定家の子孫が小倉山百人一首の歌の心ばえを語って聞かせるという節事の場面から題名がついている。加賀掾の弟子の語りものに「百人一首万年宝」があつて、やはりその題名から「小倉山百人一首」との関係があるのではないかと思われる。しかしこの正本は所在不明で、『外題年鑑』や『声曲類纂』などに題名のみが記されている。上演年代も、加賀掾の弟子分の語り物であるので、「定家」や「新百人一首」より後と考えられる。

このようにみてくると、土佐浄瑠璃「定家」は、定家と式子内親王の恋愛関係を扱った浄瑠璃としては、寛文年代の「小倉山百人一首」の後に現存する唯一のものである。そして、その脚色法は、近世的現実感に支え

られているところに古浄瑠璃から一步を進められていると考えられるのである。

三 新道成寺

「定家」の第四段め・第五段めは、「新道成寺」という尾題の内容に相当するところである。所謂「定家」の主筋の中へ、「新道成寺」の副筋を挿入した箇所である。

前半では、定家と式子内親王の恋のながちとして働いていた内親王の侍女野分の局が、第四段めに至って、定家への恋情やみがたく、馬子に変装して、東国藤川へ下る定家の馬の鞍をとって道行きをする。定家にだまされて置きざりになったと知ると、妄執の一念は蛇身と変じて大井川を渡り、定家を追いかける。しかし忠重に斬られて大井川に投げ込まれてしまう。その後、定家が寂蓮法師に頼んで女人成仏祈願の法華経読誦をしようとする、野分の霊が白拍子となって現われ、舞を舞って女人禁制の門内に入れてもらい、定家や忠重にとびかかろうとするが、寂蓮に祈られ、やがて仏果を得て昇天する。

ここでは定家と式子内親王との恋物語の筋は中断する。野分の局が内親王の侍女であるということと主筋と関連させているが、この場面が野分の局でなければならぬ必然性は全くない。三段めまでに登場する野分の局には、定家への恋情を暗示させるような箇所はどこにもない。何等の伏線なしに、四段めになって突如として、野分の局は定家への恋の執念を持つ女として登場するのである。これは、定家と式子内親王との恋物語に、道成寺の場面を挿入しようとしたために起った現象である。

なぜこのような主筋と全く関係のない場面が挿入されることになったのであろうか。まずこの場面の直接的原拠として謡曲「道成寺」を考えることができる。^(注3)

謡曲「道成寺」の内容は次のようである。

紀州道成寺の撞鐘つぎかねの再興が完成し、その鐘供養の日に白拍子が拝みにやってくる。白拍子は舞を舞う約束をして女人禁制の境内に入れてもらい、烏帽子をつけて舞ううちに、恨めしげに鐘をみやり、やがて竜頭りゅうずに手をかけて鐘の中にとび入る。

道成寺の住僧は、昔、庄司の娘が客僧を追って大蛇となって日高川を渡り、客僧をかくした鐘にまといつき、焰によって鐘をとかしてしまった話をする。

一同が白拍子のひきかずいた鐘に祈ると、鐘は動いて鐘楼に引きあげられ、中から白拍子が蛇体となって現われ、日高川に飛び入る。

「定家」では、謡曲「道成寺」で過去の出来事として物語られた庄司の女が大蛇となって恋人を追いかけた話は、野分の局の現実の行為として演ぜられて見せ場となっている。それは、謡曲の日高川を大井川とし、女の執心を知りながら逃げる客僧を定家とし、男を追う庄司の女を野分の局とすることによって、新道成寺として換骨奪胎したのである。過去の伝説的物語は、迫力のある現実の舞台上の事件として展開することになったのである。

「定家」で、野分の局の怨霊が白拍子となって法華經千部誦誦の場へ現われた所からは、謡曲「道成寺」にそって展開する。ここからは謡曲の舞台も現実の場面であるからである。「定家」ではその詞章をも、謡曲の詞章をほとんどそのまま流用している。次に両者を対比してみる。

謡曲「道成寺」

水かへつて日高川原ひたかがはらの。真砂まさじの数は尽くるとも。行者の法力ほうりき尽くべきかと。みな一同に声をあげ。東方とうほうに降三世かうさんぜ

土佐浄瑠璃「定家」

たとへいか成悪霊なり共。行者の法力つくべきかと。みな一同に声を上ケ。いらたかじゆずをおしもんで。東方

明王。南方に軍荼利夜叉明王。西方に大威徳明王。北方に金剛夜叉明王。中央に大日大聖不動。動かか動かぬかの。曩謨三曼陀嚩日羅赦。旋多摩訶嚩遮那。娑婆多耶畔多羅吒干鉢。聴我説者得大智慧。知我身者即身成仏と。今の蛇身を祈るうへは。何の恨か有明の。撞鐘こそ。すはすは動くぞ祈れたゞ。引けや手ん手に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の。黒烟を立てゝぞ祈りける。祈り祈られつかねど此鐘ひゞきいで。引かねど此鐘躍るとぞ見えし。程なく鐘楼に引きあげたり。あれ見よ蛇体は。現れたり。謹請東方青竜清浄。謹請西方白体白竜謹請中央黄体黄竜一大三千大千世界の恒沙の竜王哀愍納受。哀愍じきんのみぎんなればいづくに大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかっぱと転ぶが。又起き上って忽ちに。鐘に向つてつく息は。猛火となつてその身をやく。

(日本名著全集『謡曲百番』による。)

に。ごうざんぜ明王。南方に、ぐんだりやツしや。西方に大るとく。北方こんがうやしや明王。中わう大日大しやうふどう。うごくかうごかぬかさつくの。なまくさまだばさらだ。せんだまかるしやな、そわたやうんたらツかんまん。ちやうがせつしやとく大ちゑ。ちがしんしやそくしん成仏と。今の蛇身をいのる上は。一念毒蛇のうらみのすゑ。何有明の、つきかねこそ、すわくうごくぞいのれたゞ。ひけやてん手に千じゆのたらに。ふどうのじくのけ明王そんたい。力を合てたび給へとて。かんとくだきいのりけり、いのりのられつかねど、此かねひゞきわたつて、ひかねと此かね、おどるとぞ見えし、ほどなくしゆるうへ引上ケたり。あれ見よじやたいはあらはれたり。きんぜい東方せうりう清浄。きんぜい西方びやくたいびやくりう、きんぜい中わう、わうたいわうりう。一だい三千大せんせかいの、ごうじやのりうわう。あいみんのうじゆ、あいみんしきんの、みぎんなれは。いづくに大じやのあるべきぞと。いのりのられかつはとまろぶが。又おき上て忽に。かねにむかつてつくいきは。めう火と成て其身をやく。

(圈点は同詞章。節付けは省略)

「定家」においては、謡曲「道成寺」を使って浄瑠璃を脚色する場合、謡曲の登場人物による過去の物語は現実の出来事として舞台化し、謡曲の現実の場面は、その詞章もほとんどそのまま生かして使う方法がとられている。切り継ぎの手法ともいふべき脚色法である。能楽の舞台と同じ場面を人形によって再現する場合、浄瑠璃の中に謡曲の詞章をそのまま使った方が効果的であったと考えられる。観客は周知の能楽の場面が人形によって演ぜられ、周知の謡曲が、浄瑠璃節の中に語られるのを歓迎したのである。

このような謡曲詞章の切り継ぎによる挿入を浄瑠璃作者の未熟故とするのは当たらないであろう。それはむしろ演出効果を考えた上での意図的方法であったと解すべきである。近松門左衛門作「用明天皇職人鑑」第三にも、同じように謡曲の詞章がほとんどそのまま挿入されているのである。「かね入の段」の直前である。次にその部分を示しておく。

まさごの数、はつく、る共、仏のせい、ぐはん、つく、べきかと。皆、一、どうに、こゑを、あ、げ、東、方、に、が、う、三、世、明、王。南、方、に、ぐ、ん、だ、り、や、し、や、明、王。北、方、に、こ、ん、が、う、や、し、や、明、王、中、わ、う、に、大、日、大、聖、ふ、ど、う。な、ま、く、さ、ん、ま、ん、だ、ば、さ、ら、だ。せ、ん、だ、ま、か、ろ、し、や、な。そ、は、た、や、う、ん、た、ら、た、か、ん、ま、ん。て、う、が、せ、つ、し、や、と、く、大、ち、ゑ。ち、が、し、ん、し、や、そ、く、し、ん、じ、や、う、仏、と。ま、こ、と、の、み、ち、に、み、ち、び、く、う、へ、は。何、の、う、ら、み、か、有、明、の、つ、き、が、ね、こ、そ。す、は、く、う、ご、く、ぞ、い、の、れ、た、ぐ、く、ひ、け、や、て、ん、手、に、千、手、の、だ、ら、に。ふ、ど、う、の、四、く、の、げ、明、王、の、火、え、ん、の。く、ろ、け、ふ、り、を、立、て、ぞ、い、の、り、け、る。い、の、り、い、の、ら、れ、つ、か、ね、ど、此、か、ね、ひ、き、出。ひ、か、ね、ど、此、か、ね、を、ど、と、ぞ、見、へ、し。程、な、く、し、ゆ、ろ、う、に、引、上、た、り。あ、れ、見、よ、じ、や、体、は、頭、は、れ、た、り。

〔近松全集〕第七卷（朝日新聞社）による。節付けは省略、圈点は謡曲と同詞章

「用明天皇職人鑑」は宝永二年竹本座顔見世興行（十一月）に上演されたものである。^{（注4）}「定家」より明らかに後のものである。浄瑠璃の中へ道成寺を仕組むことは、江戸における「定家」の成功に刺戟されたものと考えられる。し

かし、ここにあげた詞章を謡曲「道成寺」と土佐浄瑠璃「定家」とに比較すると、謡曲に近くなっている。近松は、この箇所の詞章を土佐浄瑠璃「定家」に模す方法をとらずに謡曲「道成寺」によったものと考えるのが妥当である。その場合に、土佐浄瑠璃「定家」は謡曲の詞章を改変することなくほとんどそのまま挿入する方法をとっているのに対して、近松の方は多少の改変を行っている。省略した詞章が多いことが注目される。土佐浄瑠璃の詞章は、生のままの挿入であるのに対し、近松の場合は自家葉籠中のものとして再生しているということができるであろう。謡曲詞章の採用法という観点からは、土佐浄瑠璃の挿入法は近松によってより高度なものに進められているとみるべきである。

「定家」に道成寺の場面が挿入された理由として、元禄年代の社会における道成寺ものの流行が考えられる。

万治三年には御伽草子「だうじやうじ物語」三卷(注5)が刊行されている。鞍馬寺の安珍が熊野詣に出かけ、宿の女房の執心を受けることになる。日高の里まで女に追いかけられ、道成寺の鐘の中にかくまわれる。女は蛇体となって水嵩の増した日高川を渡り、道成寺の鐘をとりまき、瞋恚の炎によって安珍を焼き殺してしまう。この作では僧が安珍となっている点が注目される。安珍清姫として道成寺物が完成するのは寛保二年八月大坂豊竹座初演の浄瑠璃「道成寺現在蛇鱗」(うじげんざいりうこ)（浅田一鳥・並木宗輔合作）であるが、本作はその先鞭である。

古浄瑠璃にも「道成寺」があったことは確かである。『松平大和守日記』（以下『大和守日記』と略す）万治四年二月十三日の条にあげられた浄瑠璃草子の中に「道成寺」があげられている。これによって絵入り六段本の存在したことが確かめられるのであるが、正本が現存しないので、その内容を知ることができない。万治年間から元禄にかけての古浄瑠璃道成寺ものの流行を察知するのみである。今は前述の御伽草子「だうじやうじ物語」に類似の内容のものと推測するに留める。

延宝九年刊行の加賀掾正本「つれづれ草」には、怨念が蛇体となる趣向が扱われている。浄瑠璃の内容は「道成

寺」とは無関係であるが部分的な趣向取りが行われているのである。からくりを使って上演されて人々を喜ばせたのであろう。

「道成寺」は元禄年代以前から歌舞伎でも演ぜられている。元禄年代には上方ばかりでなく江戸でも相当に流行している。

『歌舞伎年表』によれば、正保三年（一六四六）に歌舞伎狂言で「道成寺」を仕組んことがうかがえる。すなわち、○正保三年の図には、屋根は元の如くなれども竹矢来を取て板囲とし、舞台の後に幕を張、狂言所作并「道成寺」を仕組し体なり。

とある。この時の「道成寺」は、はなれ狂言出現以前のことであるので、軽業芝居の形で演ぜられたものであろう。この後、延宝年間に二代玉川千之丞が「道成寺」を演じた記録がある。

「新刻役者全書」には

此所作も謡にもとづきて曲をなす。是を略して舞ふは、元祖榊山小四郎に始り。後の小四郎、軽業にてなすといふ、鐘入の所作事は、水木辰之助より始り、其後用明天皇上るりに仕組て、元祖荻野八重桐勤め、中古にては、古菊之丞是又此所作に名を得、無間の鐘新道成寺とて勤め、大あたりす、是を中山道成寺といふ。（『歌舞伎叢書』による）

とある。謡曲にもとづいて「道成寺」を演じた役者として、元祖榊山小四郎・後の小四郎・水木辰之助・元祖荻野八重桐・古菊之丞などがあがっている。

『歌舞伎年表』によれば、

○元禄七年三月大坂岩井半四郎座「日本阿闍世太子」。津打治兵衛作。坂東又太郎の「道成寺」大当り。

とある。また、元禄十三年十一月江戸中村座「公平六条通」大切で、沢村小伝次は「道成寺」の鐘の所作をし、二代目団十郎と釣鐘引を演じている。これらは、土佐浄瑠璃「定家」上演の頃に上演されたものである。

元禄年代には「道成寺」は浄瑠璃上演の際の間狂言にもしばしば演ぜられている。操狂言太夫の重要な演目の一つになっている。『大和守日記』にその例を見ることができる。

一、万治二年十月二十一日 本多内蔵助殿へ靈台院殿御出に付、……あやつり有。下りさつま外記、上るりかたりて権太夫

番組

○佐々木もんど

きやうげん初段（略） 二段（略） 三段 道成寺 四段（略） 五段（略） 六段

一、寛文十一年十月五日 参勤之祝……則操興行、肥前太夫也。

一、上瑠璃御前 但六段

初段 狂言（略） 二段（略） 三段 長持おとこ
伏見常盤
道成寺

四段（略） 五段（略） 六段（略）

一、延宝三年五月十三日 見物事云付、山村長太夫、并、今井久米助、山本勝之丞、松本小源次、松村源五、此外やらう二三人。小舞庄左衛門、篠塚半兵衛、相模弥五九郎、しててん孫太郎、鳴海長十郎、万作、二郎右衛門、平九郎、小歌九兵衛、此外立役者二三人。はやし四五人、狂言師雨故未后刻来、申上刻始。大書院幸敷舞台也。簾如例、番組

（略）

一、道成寺、二番続ヲ 久米助、小源次、長十郎
一番に 半之丞、勝之丞、小源次 不残出

(略)

一、貞享四年三月二十一日 今日御目見首尾能基知へ被仰付、祝儀の為操興行、已上刻二始之

○上瑠璃太郎坊根元記 六段、始前ニ内匠次左衛門、吉右衛門(次郎三郎總領也)次郎三郎名乗一人つゝ出

一、三番三 初段(略) 二段(略) 三段(略)

四段一、かね巻 しもよ次郎三郎 一、執心道成寺、白拍子次郎三郎、
教学長十郎 弟子道成寺住持 九兵衛
九兵衛

五段(略) 六段(略)

一、元禄六年二月十八日 江戸より十五日出荷物来(白河にて越年) 此便に十一日ニ久太郎并兄弟共本知ニ云付候
祝賀心ニ操二郎三郎呼、江戸本邸にて操興行番付

○富士牧狩 六段 狂言徳利狂人、付名酒おとり、どもり浪人、雪中ねこまた、……蛇道の通心、二河白道、
しうしん道成寺、(略) (圈点は筆者)

右の記録の中、貞享四年三月二十一日に「執心道成寺」の白拍子を演じているのは小山二郎三郎である。元禄六年
二月十八日に江戸松平大和守本邸において操興行の時、間狂言に「しうしん道成寺」を演じたのも小山二郎三郎であ
る。小山二郎三郎は間狂言に「道成寺」を演ずることを得意としたと思われる。

小山二郎三郎は延宝頃から元禄にかけて江戸で活躍した操狂言太夫である。『大和守日記』貞享四年二月二十三日
の条に

次郎三郎五十七歳と云

とあるので、寛永七年の生れである。『大和守日記』によれば、しばしば大名屋敷に呼ばれて間狂言を演じている。

江戸における操狂言太夫の中心的存在であったようである。そして、土佐少掾とも特別に関係が深かったと思われる。土佐少掾の操の間狂言もしばしば演じている。^(注6)延宝八年四月十一日、土佐太夫は江戸城における上覧の時に、酒天童子を演じたが、その間狂言は小山二郎三郎であった。『大和守日記』は

○上覧 酒天童子 狂言五番、すまふ、春の茶の湯、しのだ女、有馬やつこ、てんぐ包丁、

相撲人形脇より借、狂言小山二郎三郎杯、其外、上手脇より来よし、(略)

と記している。狂言師小山二郎三郎は上覧の間狂言をつとめるほどの実力と、土佐少掾との深い結びつきを持っているのである。

小山二郎三郎が土佐少掾の操興行の際、「道成寺」を演じた記録を探すことはできない。しかし、「道成寺」を得意としていた二郎三郎であってみれば、土佐少掾の操興行の間狂言に「道成寺」が行われた可能性は容易に想定できるのである。

ともあれ、操浄瑠璃の間狂言に「道成寺」が演ぜられていることは確かである。浄瑠璃と間狂言の深い結びつきは、浄瑠璃の中へ間狂言で親しまれた演出の挿入される可能性を首肯させるものである。土佐浄瑠璃「定家」に「道成寺」の場面が挿入される必然性を暗示するものである。

間狂言と浄瑠璃との同じような関係を、土佐浄瑠璃「現在松風」に見ることができる。「現在松風」は元禄六年刊行の「名よせ色竹」に扱われているので、元禄初年のものである。「定家」よりも早くから上演されていた浄瑠璃である。

「現在松風」の主筋は、行平と紅葉の前の恋愛と、これに横恋慕する定頭の争いであるが、四段め、五段めに主人公行平に恋慕する松風村雨が登場する。松風村雨は副筋として付加され、全体の脚色を複雑化しているのである。そし

て、この付加された松風村雨の場面は、その原拠は能楽であったが、操浄瑠璃の間狂言として盛んに行われていたのである。^(注7)「現在松風」の副筋松風村雨は間狂言からもたらされたものと考えられるのである。

浄瑠璃史では、操浄瑠璃の間狂言が浄瑠璃の中に吸収されることによって消滅したのは「用明天皇職人鑑」(宝永二年)からであると説明するのが普通である。間狂言の全面的廃止はこの時まで待たなければならなかったであろう。しかし、それ以前から、部分的な形で間狂言が浄瑠璃に吸収されて、浄瑠璃の脚色をふくらませ、複雑化していた試行の跡を「定家」に挿入された「新道成寺」の脚色法の中に認めることができるのである。

むすび

「定家」の脚色上の特色は、当時の人々に親しまれていた「道成寺」の場面を設けたことにある。能楽によって古くから親しまれてきた定家と式子内親王との恋愛談の中に、「道成寺」の場面を切り継ぎの方法によって挿入したのである。

「道成寺」もまた能楽によって親しまれてきた演目である。さらに元禄を迎えようとする近世社会には、広く歌舞伎狂言や操浄瑠璃の間狂言として喜ばれたものである。寸劇として、軽業芝居風に演ぜられたのであろう。「道成寺」が操浄瑠璃の間狂言として演ぜられているうちに、浄瑠璃との結びつきが実現したものと考えられるのである。

「定家」は当時流行の「道成寺」をとり入れることによって、脚色面では複雑化の様相を呈している。内容的には、先行浄瑠璃によって定着していた既成の世界に新鮮な興味を誘うことになった。「新道成寺」の場面は、からくりを使って上演され、人々のスペクタクル的興味を十分に満たすものであったと思われる。「定家」上演の後、宝永から享保にかけて浄瑠璃・歌舞伎に「道成寺もの」が頻出することになる。主なものを挙げれば次のようである。

三世道成寺	元禄十四年	江戸 森田座
道成寺	元禄十五年十月	江戸 山村座
道成寺	元禄十六年六月刊	「松の葉」所収
追善道成寺	宝永元年三月	京 早雲座
糸鬘頭の男道成寺	宝永三年春	京 早雲座
用明天皇職人鑑	宝永三年十一月	大坂 竹本座
三井寺龍燈のつきがね	宝永四年十一月	江戸 中村座
男道成寺蚊屋之段	宝永六年三月刊	「落葉集」所収
契情道成寺	享保八年二月	(荻野八重桐)
三国道成寺	享保十一年三月	(初代荻野伊三郎)
傾城福引名護屋	享保十六年正月	江戸 中村座
妻迎鶏曾我	享保十六年三月	江戸 中村座 (道成寺所作事の始)
傾城道成寺	享保十六年三月	(瀬川菊之丞の舞踊)

これらを経て、「道成寺もの」は寛保二年八月大坂豊竹座初演の浄瑠璃「道成寺現在蛇鱗」(浅田一鳥・並木宗輔合作)、宝暦元年大坂竹本座初演の浄瑠璃「日高川入相花王」(ひだかがわいりあいざくら)(竹田小出雲・近松半二ら合作)、宝暦三年江戸中村座初演の歌舞伎「京鹿子娘道成寺」などの大作が出現することになるのである。

「定家」はこれらの「道成寺もの」流行のさきがけをなしたものとして演劇史上に位置づけることができるのである。

なお、加賀掾正本に「竜城連理鐘」がある、この作には「道成寺」が変形されて使われているのであるが、その初演年代は「定家」よりも後と考えられる。「竜城連理鐘」について若月氏は元禄初年と推定されたが、元禄十三年頃刊行の「大福神社考」の改作と考えられるので、元禄末年から宝永以後の作と推定される。^(注7)したがって、「竜城連理鐘」は「定家」の影響作と考えられる。両者の関係については稿をあらためることにする。

注

(1) 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第一解題六五九頁および同書第三所収「土佐浄瑠璃抜き本一覽」参照。

(2) 定家と式子内親王との間に恋愛関係はなかったとするのが通説であるが、式子内親王の恋歌から、二人の恋愛関係を認めようとする説もある。「式子内親王「忍ぶること」と歌」近藤潤一(『国文学』昭和56年4月号)参照

(3) 謡曲「道成寺」の作者は未詳。「能本作者註文」には作者未詳の部に「鐘巻」として入れている。足利將軍義政公の時、観世観阿弥が作り、観世左近之進が能に仕組んだとも云われる。『江戸近世無踊史』九重左近著

(4) 『今昔操年代記』の記述による。

(5) 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵。刊年不明の後印本が東京大学総合図書館霞亭文庫にある。(『^国東 東方仏教叢書』第二輯文芸部所収)

(6) ○元禄四年十一月二十二日 我等五十算賀祝……浄瑠璃太夫は記載されていないが、「酒天童子」「前中書王」を演じていることから、土佐少掾と考えられる。この時の「役者」として、「狂言太夫次郎三郎」の名が記されている。

(7) ○明暦四年四月七日「上るりもるとき」初段間狂言

○寛文二年八月十八日 堺町狂言付に「狂乱松風」

○延宝二年八月二十八日 狂言番付に「松風村雨」以上『大和守日記』

(8) 「宇治加賀掾年譜」信多純一編(『加賀掾段物集』所収)参照。正徳三年春刊「翁竹」(門人栄竹による加賀掾一周忌追善集)所収の加賀掾の九曲の語りものの中に「道成寺」がある。詞章は能の詞章を簡約したものである。

(付記) 本文引用は左記による。

定家……拙編『土佐浄瑠璃正本集』第一松平大和守日記……若月保治著『近世^初国劇の研究』 小倉山百人一首……横山重編『古浄瑠璃正本集』第四